

祀り込める言葉は巻物の形状に記されていることが先験的に重要なのではなく、儀礼における音としての機能を示すものとして巻物のかたちが必要とされたのであろう。巻物の内部に記されている文字は船霊の祭祀にあたっての口頭性を内包しているものであり、それは日常的な言語ではなく、儀礼という非日常の場でのみ現出するという性格を巻物のかたちで示しているのである。

船霊祭祀に重要なのは個々の神霊よりも神霊が宿るといふことを確認することであり、かつての船大工は現実の船の造作とともに精神面での造作を担っていたと言えよう。そして船霊祭祀における巻物は儀礼に際して音声化される祭文が日常とは異なる位相の言語であるということをかたちの面から示しているのであろう。今後はこうした船大工の巻物にみられた性質が他の職人巻物にも通底するものなのかの吟味が必要であらう。さらに諸職人の巻物を横断的に検討することで、用いられた宗教的知識の系譜や時代性を探ることも心がけていきたい。

渋谷区所蔵の伝・食行身祿書簡

大谷 正幸

東京都渋谷区にあった山吉講(やまさちこう)は、江戸市にできた富士講の中でも有数の講である。講祖である吉田平左衛門(一六七三―一七五二)は、角行系の行者・食行身祿(一六七三―一七三三)の著作に現れる「渋谷の藤八」という信徒と同一人物と考えられる。吉田家は山吉講先達(文書によって「講頭」としてこの講のリーダーを世襲した)。

山吉講は食行の自筆文書を一通所蔵していた。山吉講は既に無く、現在は渋谷区立の白根記念渋谷区郷土博物館・文学館が「伝・食行身祿書簡」として所蔵している。この文書の存在は、部分的な影印とともに岩科小一郎『富士講の歴史』(名著出版、一九八三)にて初めて紹介された。岩科はこの文書の末尾を引いて「この一札によって、身祿の跡目はお花に譲られた、と弟子達の間では解している」(二〇七頁)とし、つまりこの文書は食行の後継者が三女のはな(一七二四―一七八九)とされたことを示すという。岩科は当時在世していた十代目の吉田平左衛門から山吉講について聞き書きをしており、その紹介は吉田から聞いたものと推測できる。

二〇一〇年一月から三月にかけて、同館では特別展「渋谷の富士講 富士への祈り」として、山吉講旧蔵の史料をはじめとする同区の富士講に関する遺物を展示した。私はこの機会にくだんの自筆文書の撮影を許された。文書は四枚の和紙を継いだもので、大きさは三一・三×一五・二〇センチメートル(大谷の計測による)。茶褐色の料紙(柿渋を塗ったものか)は酸化が進んでおり、縁が割れるように劣化しているのが現状である。墨書の筆跡は、他に残る食行自筆文書から、本人のものである可能性が極めて高く、文面の内容も含めて彼の真筆を疑う要素は見当たらない。

文面については、まず五行お身拔(師の月行から始められた礼拝対象となる神号の書式)に始まり、食行による和歌、「三國第一山」「参明藤開山」の富士山の尊号への三通りの読み、「南無仙元大菩薩様」と呼ぶ神による神告(御傳多)、食行が享保十

八年六月から富士山頂にある釈迦の割石なる巨石にて自殺する旨の宣言が述べられている。食行は「身祿の御世」という時代観念を主張しているが、ここで述べられていることは、食行の著作の中でも末期のいわゆる『お添書の巻』(一七二三成立?)の内容に近く、食行の基本的な著作である、いわゆる『一字不説の巻』(一七二九成立)における主張とは異なる部分がある。

文面の最後に、四箱の書物を板橋宿に住む同郷人・永田長四郎に持たせて下山させ、江戸の妻子に預けた後、三女のはなに持たせて幕府大目付に遣わし、そのうち二箱を將軍と天子に読ませるよう指示している。少なくとも、岩科が言うような(おそらく山吉講で言われてきたような)、食行の後継者をはなとするような意味の内容として読むことはできない。「四はこの御かきもの」が、この文書や類似の文書を入れたものか、あるいは食行の著作を四つの箱に詰めたものかは、この文面からはわからない。

この文書とほぼ共通する文面を持つ文書が、吉田(山梨県富士吉田市)の御師だった田辺近江家に旧蔵されており、現在は富士吉田市歴史民俗博物館に寄託されている(個人蔵)。これは「御箱上書并御足駄訣一卷」と名付けて軸装されており、二一・二×二二五・〇センチメートルと山吉講旧蔵文書に比べて一回り小さい。山吉講旧蔵文書と異なるのは、末尾の文章が職業宗教者への中傷と、彼らを禁じた「南無仙元大菩薩様」の支配による新時代「身祿の御世」になったという宣言になっていることである。

本発表に際して、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館ならび

に富士吉田市歴史民俗博物館からご好意を受けた。記して謝意を示すものである。

琉球王朝における植物のシンボリズムと聖地

平良 直

本発表では、一七一三年に編纂された『琉球国由来記』中の御嶽の神名を手掛かりに王朝・聖地・植物の象徴との関連を探り、王朝の巫女組織制度のなかでどのような機能を果たしてきたのかを考察した。発表ではまず、琉球・沖縄史の概観、宗教伝統の特徴の予備的な説明を行い、『由来記』記載の植物の名称がそのまま神の名になっている事例を取り上げながらどのような象徴連関や意味の解釈が可能かを考察した。

本発表の標題の意図はさしあたり琉球王朝時代から管理されてきた聖地における植物の象徴的機能を理解しようとするものであるが、近年の世界遺産登録後の聖地の観光化にともなう聖地の管理・専有の問題、現代的状況の中での聖地の非聖地化と新たな「聖地化」といった聖地の意味の変容の問題と関連付けることをもくろんでいる。

琉球の史書の神話や神歌から分かることは、祭祀中心としての御嶽が神話的原初の姿をそのままとどめる世界像を示していることである。世界像を構成する御嶽は石、岩、植物からなりたっており、いわば世界の原風景、もしくは世界の原像を構成している。

『琉球国由来記』(一七一三年)の御嶽の神名ではイシラゴノ御イベ(石)、コバツカサノ御イベ(植物)などの例が見られる。